

『孝子物語』（高島平三郎立案、渡邊霞亭編述）

提供：藤本百男県議会議員

孝女ふさー孝子物語に書かれた物語 ①

「孝女ふさ」は、18世紀半ば、江戸時代に播磨国加東郡上三草村（現在の加東市上三草）で親に孝行を尽くした人として知られ、戦前には修身教科書にも取りあげられていました。上三草の旧京街道沿いにふさの孝行を讃える「彰孝碑」が建てられており、今も地元の人々の皆さんが清掃をして大事に守っておられます。

その「孝女ふさ」について、この度、武蔵野大学の貝塚茂樹教授から大正6年（1917）に発行された『孝子物語』（高島平三郎立案、渡邊霞亭編述）の中に「孝女ふさ」の項があると教えていただきました。「孝女ふさ」は修身教科書のみならず国語教科書にも取りあげられており、その回数はあの野口英世博士よりも多いということも教えていただき驚きました。

「孝女ふさ」については、地域の歴史書である『加東郡誌』、『上福田村史』、『新修加東郡誌』などにその記事があります。また、修身教科書にも記述があるのですが、『孝子物語』は物語として書かれているふさの話で貴重なものです。

郷土が生んだ孝行の模範「ふさ」の物語を紹介します。4章構成になっていますので、1章ずつ紹介します。歴史的かなづかいは現代かなづかいにしました。

孝女ふさ

一 八歳で草履売

今からちょうど百四十年ほど前（※1917年時点）、播磨国の加東郡上三草村（かみみくさむら）という所におふさという少女がありました。

家は貧しい百姓で父も母も毎日毎日田圃（たんぼ）へ出て働いていました。おふさは八歳の幼い時分から、近所の家へ子守に雇われたり、お使いをしたりして家の活計（くらし）を助けていました。夜になると父が草履（ぞうり）や草鞋（わらじ）を作る傍ら（かたわら）で、時分も藁（わら）を打ったりして手伝っておりました。そして、その草鞋や草履を売りに行きました。

おふさは毎日街道筋の松並木の傍らへ出て、父の作った草鞋を売っています。

「おい少女（おねえ）さん、草鞋を一つおくれ」

「おゝおふささんか、毎日精が出るのう、どれ私も一つ貰（もら）おうか」

「おふささん、お前の売っている草履は中々よく保つ、同じ銭を出しても、外（ほか）ではこんな丈夫なのは買われない」

「おゝそんな丈夫なのなら、私は三足程貰います」

「おいおふささん、向うの茶店の婆さんが、お前の来るのを待って居るぜ。同じ草鞋でもお前の草鞋は客受けが好いと云っての」

知った人も知らぬ人も、争うておふさの草履や草鞋を買って行きます。

「はい毎度有り難うございます」と、おふさは売れ残った分を肩にかけて道を急ぎました。村端れ（はずれ）の茶店ぼ前を通り掛けますと、ちらとおふさの姿を見た婆さんが「おふささんじゃないか、今日は大層急いでいるねえ、どうしたんだえ」と尋ねました。するとおふさは

「はい、もう日が暮れますので、お父さんの迎ひに山へ行かねばなりません。又明日の朝ゆっくり寄せて貰います」

「それはすれは感心な事じゃ、お前の孝行は此の村で誰知らぬものもない。昼は使い走りや子守に雇われて、其の間には、こうやって草履や草鞋を売って歩き、日が暮れかゝると、年とったお父さんを山へ迎えに行く。夜は仕事の手伝いをしてお母さんの手助けをする。なかなか八歳や九歳で大人も及ばぬ働きをするのは、教えても出来ぬ事じゃ。然しな、おふささん、私の店へも、もっと草鞋を売って下されや」

「はい毎度有り難うござります。それではこゝに五足ありますから、是（これ）だけ置いて参ります」

おふさは肩から草鞋を下ろして渡しまして、其のまゝ家へは帰らずに、山へ登って行きました。日はもう、西の空へはいつてしまつて、真赤な夕焼の雲が、薄暗くなった林の中まで照らしています。おふさは「お父さんお父さん」を二声三声呼びますと、「おういおうい」と答えるのが、木霊（こだま）に響いて聞こえます。どこにお在（い）でなさるかと思う中、足元の方から登って来る父の姿が見えました。おふさは喜んで「おゝお父さん、迎えに来ました」と云いました。父は「それはまあ有り難い。少し遅くなるとお前が心配して迎えに来るから、早く帰ろうとは思ふが、仕事の都合で、やっぱり此様（こんな）に遅くなる、どれそれでは帰ろうか」と、おふさと共に山を下りました。

二 悲しい別れ

斯（こ）うした状態（ありさま）が二、三年も続きました。親は子を思い、子は親を思う親身の真情（まごころ）を基礎（もと）にした家の内ほど、平和で清く美しいものではありません。おふさの家は近所の褒められものになりました。親子が心を一つにして生計（くらし）を立てゝ行きますと、貧しい家にも光があります。

処（ところ）が天はこの繊弱（かよわ）いおふさを玉にしようと思召したのであります。父は不図（ふと）した風邪が原（もと）で、終（つい）に頭も上らぬほどの大病となりました。父が病気になってからは、家の生活（くらし）が苦しくなります。おふさは何（ど）うかしてと思いますが、女の手一つでは良い薬一服買うだけの稼ぎも出来ませんから、幾夜も幾夜も考えた末、炊事奉公（みづしぼうこう）に身を売って、その前借金を父の薬代に当てようと決心しました。然し夫（それ）をするには父の側を離れなければなりません。もし自分が居なかつたら、父が何様（どんな）に不自由をするかも知れないと思ひますと、思い切って父の手許から離れる事が為（で）きませんので、暫くの間兎つ追いつ（とつおいつ）考えて居りましたが、爾（そ）うして居ては限りがありませんから、漸（やっ）と心を決めて父にその事を打ち明けました。

「お父さま、私は御奉公に参ります。お淋しいかも知れませんが、暫く御辛抱なすつて下さいまし、その内には無事で帰って参りますから」

涙や心配な顔を見せては、父が悲しむだらうと思えますから、成るべく平気を粧って何気無い様で云いますと、父は面（おも）を背けまして

「爾うか、よく決心して呉れた。お前の親切でわしの病気は快（よ）くなります。どうか無理をして患って呉れるなよ」と、齒を切（くいしば）って云いました。

父もこゝで泣いては、おふさが悲しい上にも悲しむだらうと思えますから、煮え返るような悲哀（かなしみ）を怵（こら）えて、涙を見せぬようにして居ました。おふさも泣かず、父も泣かず、表面は一滴の涙も見せないで居ましたが、二人の胸の底には万斛（ばんこく）の涙が大波のように流れて居ました。

「それではお父さま、わたくしは御奉公に参ります。お薬は仏壇の抽斗（ひきだし）に入れてあります。お母様何（ど）うか煎（せん）じて上げて下さいませ。お給金を戴きましたら、すぐお届け致します」

母も同じように齒を切（くいしば）って「はいはい」と云って居りました。

おふさは父に別れを告げ、母に後々の事を頼んで置いて、他家へ奉公に参りました。母は戸の外まで見送って出ます。父は病の床で咽せ返って居りました。三日月の影が門（かど）の柳の枝にかゝって、きらきらと光って居ます。星は皆な目叩（まばた）きして、孝女の憂き別れを悲しむように見えます。

三 孝女の奉公振り



孝に厚い者は忠にも厚いと云いますが、全くその通りで、おふさは主人大事とよく勤めました。朝も、夜も、星を戴いて野仕事を致します。雨でも降って家に居りますと、草鞋を作ったり、繩を緇（な）ったりします。そうして片時も油断しないで、一生懸命に働きますから、主人も大変気に入って「おふさおふさ」と可愛がります。

雨祝いなどで休みがありますと、田舎の事ですから、餅を搗（つ）いて喜んだり、祭礼（まつり）があるか、仏事でもあると、温飩（うどん）を打ったり、お萩餅（はぎ）を拵（こしら）えたりして馳走をします。雨祝いや祭礼には、村中が休みますから

「おふさや、毎日よく精を出してくれますねえ。今日は村中がお休みだからお前さんも休みなさい。恰（ちょう）ど餅（あんも）を搗いたからこれを上げます。お萩餅もあるからお喫（あが）りなさい」と云って、お暇と甘味（おいし）い物を呉れます。するとおふさは之れを一個も食べませんで

「有難う存じます。それでは一日遊ばせて戴く代りに、どうぞ実家（うち）へ帰らせて下さいませ。この餅や、お萩餅を、病（や）んで居るお父さまのお土産に致します」と云うのが平生（つね）でした。

主人も同じ召使も、おふさの心掛に感じないものはありません。

「休みだからお前の好いようにしてお暮らさない。内へ帰るのだったら、此方のを上げますよ」と云って、別に多くの物を呉れるようになりました。

おふさは夫を風呂敷に包んで、いそいそと実家へ帰って来まして

「お父様、これをお喫りなさいませ、これは御新造（ごしんぞ）さんから戴いたのでございます。またこれは旦那様が下さったのでございます」と、貰って帰った物を枕頭（まくらもと）へ並べます。

父は夫（それ）を見るたびに嬉し涙を流します。どう云うものか、病気は快い方に向いませんで、段々痩せ衰（やつ）れて参りますが、おふさの優しい心に触れますと、俄（にわか）に蘇生（よみがえり）たようになります。常にはお粥も重湯も食べ難（か）ねる程ですが、おふさが持って帰ったものは、何の苦も無く咽喉（のんど）を通過して行きます。母親もそれには感心しまして

「まあ、何という不思議なことだろう」と云って驚きました。

おふさは、父の食い余した物は、次に母へ侷めまして、その上でないと、自分は戴きませんでした。

「今日は真実（ほんと）に心持ちが好い、これでわしは全快します」

父が心から歎ぶ背後（うしろ）を、柔らに撫（な）で擦（さす）りを致します。偶（たま）の休みに、外（ほか）の奉公人や村の人たちは、唄祭文（うたさいもん）を聞いたり、素人芝居をしたりして遊びますが、おふさは実家へ帰って、父の看病を致すのを第一の楽しみと致しました。

時間の許す限り介抱をしまして、主人の家へ帰りますと、翌日は平生に幾倍して精を出します。

「昨日一日遊びましたから、今日はその埋め合せに二日分のお仕事を致さねばなりません」

斯う云って勉強します。世に奉公人根性という者があって、主の目の届かぬ處（ところ）では、成るべく骨を盗むようにしますが、おふさは主人の目の届かぬ處でも、一層熱心に働きました。主の為に働くのは、将来必ず自分の身に報いて来ます。つまり自分の為に働くと同じことです。

四 後の幸福（しあわせ）

父は随分手を尽くして養生もし、またおふさも為（で）きるだけ慰めもし、神仏も祈りましたが、とても助かる見込みのない病気という事が分かりましたので、父はある日おふさを枕許（まくらもと）へ呼びまして

「おふさや、私も年が老（よ）って、こんな大病に罹ったので、今度はとても助かるまいと思う。私に働きの無いばかりに、幼いお前に大そう苦勞を掛けてついぞ今まで親らしい事もせないが、奉公に出したのさえ恨まず、こうやって時々尋ねて来れる孝心は、死んでも忘れる事はできぬ。村中のお方が、おふささんは孝行じゃ、おふささんは感心じゃと言われる毎に、私の肩身が広うなって、お前のような娘を持った仕合せを有り難う思います」と、涙と共に喜びました。

まもなく父は病死しましたので、おふさは天地も覆るように悲しみましたが、その中でも母への孝養を怠りませんでした。主人持ちでは思うような助けも出来ませんので、家へ帰って孝養を尽くしたいと思ひまして、その事を主人に頼みましたが、おふさが忠実（まめまめ）しく働いてくれるので、主人は惜しがつて容易に暇を呉れませんでした。それで暇のある毎に家へ帰って、母の心を慰めては

「お母さま、ご心配なさいますな。随分心を大きく持って在らっしゃい。その内にお暇を戴いて、お母さまを安息に致します」と云い云いしました。

母は良人（おっと）に死に別れても、後にお房が居ますので、おふさを杖に生きて居ました。おふさは主人大事と働きながら機（おり）があると主人の前へ出まして

「お母さん一人で淋しがって居りますから、どうかお暇を下さりませ。長の年月の御恩は忘れません。その内、母を見送りましたら、一生涯御奉公をして、これまでの御恩を送ります」と頼みました。

その心を推察して、主人はとうとう暇を呉れました。おふさは飲んで家へ帰り、母の綿つむぎの手伝いをして、乏しいながら心安い世を送りました。

おふさの孝心がいつの間にか役人衆の耳へ入りまして、御褒美のお金を戴きました。それが段々世間の噂になって、諸方から同情を得まして、後には大へん幸福な生涯を送りました。

以上が『孝子物語』にある「孝女ふさ」の物語でした。

